

『農学職 総まとめ講座 植物生理学・土壌肥料学』(KU18230)

訂正表

2023年3月9日現在

ページ	訂正箇所	訂正内容	掲載日
P. 16	上から 16 行目	誤 生成した <u>PGA</u> は、一部が糖の合成に利用され、	2019/11/15
		正 生成した <u>GAP</u> は、一部が糖の合成に利用され、	
P. 16	下から 9 行目	誤 3-PGA (C ₃) とホスホグリコール酸 <u>PGA</u> (C ₂) に分解する。	2023/3/9
		正 3-PGA (C ₃) とホスホグリコール酸 <u>PGA</u> (C ₂) に分解する。	
P. 25	上から 8 行目	誤 光散乱で光が通過する距離を <u>大き</u> する構造	2019/11/15
		正 光散乱で光が通過する距離を <u>大きく</u> する構造	
P. 29	下から 13 行目	誤 (c) トリカルボン酸回路 (<u>tricarboxylic acid circle</u> ;	2019/11/15
		正 (c) トリカルボン酸回路 (<u>tricarboxylic acid circle</u> ;	
P. 29	下から 6 行目	誤 ③ 呼吸の ATP 生産の収支 (解糖系・ <u>TAC</u> 回路	2019/11/15
		正 ③ 呼吸の ATP 生産の収支 (解糖系・ <u>TCA</u> 回路	
P. 35	上から 16 行目	誤 (b) <u>フィトビリン</u> (フィトクロム, フィコシアニン)	2023/3/9
		正 (b) <u>フィコビリン</u> (フィトクロム, フィコシアニン)	
P. 42	下から 7 行目	誤 (a) デンプンの合成経路: 貯蔵デンプン(<u>strage starch</u>)	2019/11/15
		正 (a) デンプンの合成経路: 貯蔵デンプン(<u>storage starch</u>)	
P. 52	下から 1 行目	誤 ⇒ クリプトクロムとフィトクロムは <u>協調的</u> して	2019/11/15
		正 ⇒ クリプトクロムとフィトクロムは <u>協調</u> して	
P. 59	下から 10 行目	誤 ・イネ(短日): 暗期<限界暗期 ⇒ <u>Kd1 増加</u> ⇒ <u>Kd3 減少</u> ⇒	2019/11/15
		正 ・イネ(短日): 暗期<限界暗期 ⇒ <u>Hd1 増加</u> ⇒ <u>Hd3 減少</u> ⇒	
P. 60	表 1.8 の植物例の長日植物の 2 行目	誤 <u>イロイヌナズナ</u> *	2019/11/15
		正 <u>シロイヌナズナ</u> *	
P. 60	上から 16 行目 (表は行数に数えず)	誤 ソビエト連邦(当時)の <u>M.Kh.Chailakhyan</u> は、	2023/3/9
		正 ソビエト連邦(当時)の <u>M.Kh.Chailakhyan</u> は、	
P. 70	下から 5 行目と 2 行目	誤 頂芽優先	2023/3/9
		正 頂芽優勢	
P. 72	上から 1 行目	誤 <u>gebberellin</u>	2023/3/9
		正 <u>gibberellin</u>	
P. 81	図 2.2 の 2 段目	誤 	2019/11/15
		正 	
P. 86	上から 5 行目	誤 通常, 土壌 A 層は数%~10%の有機物を含んで <u>あり</u> ,	2019/11/15
		正 通常, 土壌 A 層は数%~10%の有機物を含んで <u>おり</u> ,	

P. 88	上から 11 行目	誤	絶対値の常用対数値 ($pF = -\log \Psi $)	2019/11/15
		正	絶対値の常用対数値 ($pF = \log \Psi $)	
P. 88	上から 13 行目	誤	① 最大容水量: $\Psi - 0.1kPa$, $pF0$	2019/11/15
		正	① 最大容水量: $\Psi - 0.1kPa$, $(pF0)$	
P. 89	図 2.7 の pF 値の一番上	誤	0	2019/11/15
		正	(0)	
P. 92	表 2.4 の題名	誤	表 2.4 粘土鉱物と腐食物質のイオン交換容量	2019/11/15
		正	表 2.4 粘土鉱物と腐植物質のイオン交換容量	
P. 93	上から 16 行目	誤	難溶性の塩となり,	2023/3/9
		正	難溶性の塩となり,	
P. 112	上から 14 行目	誤	(d) アスパラギン合成酵素 (asparagine synthetase ; AS) ;	2019/11/15
		正	(d) アスパラギン合成酵素 (asparagine synthetase ; AS)	
P. 116	上から 7 行目	誤	④ 酵素の活性化: カルモジュリンと結合して,	2019/11/15
		正	④ 酵素の活性化: カルモジュリン等の Ca 結合蛋白質と結合して,	
P. 123	下から 13 行目	誤	③ 熱帯マメ科植物の SO_4^{2-} トランスポーターでは, MoO_4^{2-} と輸送できるものがある。	2019/11/15
		正	③ 熱帯マメ科植物の SO_4^{2-} トランスポーターでは, MoO_4^{2-} を輸送できるものがある。	
P. 127	表 3.5 の項目名の右端	誤	単性窒素固定微生物	2019/11/15
		正	単生窒素固定微生物	
P. 128	上から 5 行目	誤	(ii) β -subunit : P-cluster (Fe_8-S_7 cluster) を含む	2019/11/15
		正	(ii) β -subunit : α - β subunit 間に, P-cluster (Fe_8-S_7 cluster) を含む	
P. 133	13~14 行目	誤	世界の年間需要量は約 1.5 億トン(窒素換算: 約 7,000 トン)で, 需要量 2 位の硫安約 2,200 万トン(窒素換算: 約 460 トン)を大きく引き離している。	2019/11/15
		正	世界の年間需要量は約 1.5 億トン(窒素換算: 約 7,000 万トン)で, 需要量 2 位の硫安約 2,200 万トン(窒素換算: 約 460 万トン)を大きく引き離している。	
P. 141	上から 8 行目	誤	通常, 窒素酸(N)は 30~50%程度,	2019/11/15
		正	通常, 窒素(N)は 30~50%程度,	
P. 142	上から 3 行目	誤	① 有機栄養説: 1731 年, スウェーデンのワーレリウスが最初に唱えた。	2019/11/15
		正	① 有機栄養説: 1761 年, スウェーデンのワーレリウスが, 腐植栄養説を最初に唱えた。	
P. 142	上から 12 行目	誤	正統な評価がなされてきている。	2023/3/9
		正	正当な評価がなされてきている。	
P. 142	下から 1 行目	誤	$dy/dx = a(A-y) y = A \{1 - \exp(-ax)\}$	2023/3/9
		正	$dy/dx = a(A-y) \therefore y = A \{1 - \exp(-ax)\}$	
P. 150	表 4.1 の植物の応答の 13 行目	誤	表皮クチクラ反射や色素吸収で内部被曝線量を低減	2023/3/9
		正	表皮クチクラ反射や色素吸収で内部被曝線量を低減	
P. 151	上から 13 行目	誤	糖アルコール類(ソルビトール, マニトール等),	2019/11/15
		正	糖アルコール類(ソルビトール, マンニトール等),	

P. 169	[No. 10] 正解と肢4の解説文	誤	[No. 10] 〈窒素代謝〉 正解 4 4 ○ グルタミンは、グルタミン酸合成酵素(GOGAT)の働きで、2-オキソグルタル酸と反応して、グルタミン酸2分子を生成する。	2023/3/1
		正	[No. 10] 〈窒素代謝〉 正解 ナシ 4 × 最初に生成するのは、上記の通りグルタミンである。グルタミンは、グルタミン酸合成酵素(GOGAT)の働きで、2-オキソグルタル酸と反応して、グルタミン酸2分子を生成する。	

※「掲載日」は、上掲訂正情報がLECホームページの『公務員 テキスト改訂・修正情報一覧』(<http://www.lec-jp.com/koumuin/info/teisei/>)に掲載された日付です。